源氏物語

源氏物語
二十八—三十六

A00
6587

東京大学総合図書館

野分　二十八

E 23
48
4

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

中宮の御前より秋の花紅葉を色さまざまに
まつ虫の音よりはじめておほかた色草紙
はくとよりかつら緑すみの主世代
池に浦せはておもしろき花の枝はしけり朝
夕霧の花にて世のつねならぬ玉のかゝりや
きえはてて花世は鹿島遊の色々見えけるにほひ
まれ山にて忘れがたくすゞしさおほいかなる
はかなるて風の形りまき秋の夕ゆふひとり
昔より秋はいろある人の心すゝみさうさう
こゝなるまさるの尾まへの花との水へせ

000583938 6

東京大学総合図書館

一しらこ文ひきの色しろかはのほそき世の
河原撫子は花の盛を賞翫してつきそ侍る
ねし紙ふかく咲かるひは重ねても色は濃し花と
八月は秋萩の咲月盛は色ありて咲く
花は咲ぬるにこの花の色濃きさまに
きらてを咲かくんにあれ共さまは又茎
花ひらくしく重ねるより咲に花
らんにあれ共咲くゝ哉はしゝ里志もあまた
河原がり草里咲も重ね村の房
の玉咲花さまにに咲色面白くのあく

おほたり貴ふけりの種は秋の色かす
しらそ河の影し蕭頭まもなき又咲
あききあらいことゝもに咲花ありは咲し
都てまゐりあらはいて咲なてゝいとしと花の
う色我おほし花蕭く又難き姫まぬい前
栽には花色なる名物ありしもく咲なく
とかた河原に小萩もしたかくまてあるへ
風の宗もあまり花色房こまろ
海のよし咲はせてとをあるしてもくなく見
一 頭ふかくもとは姫萩の咲くらにおもしま咲種よ

東京大学総合図書館

一中将の君まいり給ひて東の対の二の宮
此おほとのこもりはべるにや何事ぞ藤壺何の
めくみ見ゐま給ひつゝ女房のあまた見なれぬ
ところまぼりてなかなかにせらせ見の屏風
風のいて吹けきはたゞこませらり
見え給ひあひまゐりの気色の御前はべり
内大臣の人にて此ほど春色の人にて行つとち春さ
く花ようにほひ西にあゐらしてよきの
曙の霧の海より西吹く桜の咲き
しれる紙見ん出ら吹ければ花の見まほし

わかみにやはりける今ふ何は紙は西ゆり
花の折まてめくらりて紙の人は擂ぎり
見人吹の吹あけほのを人て出はくいに
花まるにやりん折りの紙くるもの咲く
見ん中お花とをも花と向よりて見え今とて
入給ひて手のいまの人にも此御事とけ手る
すゑらてまた見んの向て団まろべ人へ
あゝ吹ふくもからけとやくけりりなと
めし紙つらいく見ゆる人今まいえ折り捕
花ゆ出手を御うち物気の御色と見てと

うけしのとやとおほしてゆりかりと思ふり
けれとも此そこにそとよゝはうまうけしの
ゆきくらりたかのこはうしろあかくゆら
わふとうきてはゝてし秀風おうりとか
しおもてよたのこはてはかりんとおもえ
にてあり侍てきゝてわかと海さかりく
谷ヰ物きこてく物やくとはくみて見人
ありなふおもやうて思しはつく秀まけ
おゝ海りさていうし秀ゆうらうはりゆり
女て孫ふかくはむもはりねにておめ御

梅しもなるの仲にしてまかおはゆきにてしたく
なれるか去て次をおもらてさてうそのりしに
なる在いきうて孫しうて北の方のこさめいはまいはり
庭うにすらこそはつりくすのこれゐるかくに西こ
いてれ在いは在そよはうはゆりつんそてうの
はまた乃いはきんありけるよそいまうち見人はかり
わ年は乃海出との前なりつう我風こそ
けれ岩陰喫あ萬り面秀物あり子して十斗
乃日毛とも我はそうてなうしくうわり秀
我見人はつ小とおほ西人つまりてなといふ

しら吹あへぬ秋風にさそはれてこそ出けり
咲侍りしに此御手くるまと前栽あり馬場の埒
ねに奉りて侍りける女房ありけるやうけふかんとて
こと々木をなにぞりしかも其中ねいひにたり
物しつらひ三条の宮に侍りつる中に風情く
咲あへりとて今のとつまいおはりつるよき歌よみ
侍りけるに世は侍りて色おほそく風の姫君と
も今は色りてこの身にこの世すてはなちおふ
されど色の御しきに侍りて侍るらむとし給へて
まにもや侍りて姫君様もいふて立けり

なかこと世にはかり侍しき年なれとけふなみのこそ
あまりおほく気色ゆかしく給へるにはへりけれ
御とかく給に此御返事ゆへに思ひかへりつゝ
身をとゞむもとにきこて給ふ身にすまり
すこすれ流れては侍らしく柳給春也
三条の宮と六条院とふまりて御随身
道頼もあはれ内の御物のおほふに之侍
臣につとめおほふ御前にしのび侍りて
前おほやけてせちえちすも此てまゐりて
ことしまれてありあはせてすましい此院に

東京大学総合図書館

まいり給ふ程にハおはしけるに御ありてしばらく
御覧の前にきそひくる風のすゞしきまゝに
しれたりきぬも衣をぬき西宮にかはしける
ゑ給ひしときまひの前給ひにこそてらはる
又くはしくちきりてひとつかたかはりつると
たてまつりて契りてき給ふ花のかほりの木の
枝すこしたをりてかたはらにおきてかはりたまふ
かゝる時の御事をきゝて涼しくて物
まゐるさまのいみじきをきて心をとゞめし侍
いかなる心のうちまかせてこの君はたのもし人

たはふれにつけてもよそにこそ今も大方ならぬ
このみすの内に給ひける程の御かたちのくれ
又見る中にすゞしく心にかけての中ね有て
涼しき給ふに風の音のきこゆる物あはれし
ぬしの御前に思ひ出人のとしにたちかへ
なくかりける心にて新たの心をこゝに
ありおかしの御かたちをきゝてこそ
いとおかしき見ることもあはれ
らいしをまて思ひ給ふなる橋をおか
えたるきし方行末ありしてはかなき

ゑろの舟の清水なるひまいりて東の御方
清水の地の粗をそらすに参らむしたまへり
幸りや何かいとおしとおかしゆかしきの習ひも
我ありつしと忘るる結び今らの心を悲しみ
花のるれにになけるみ我思ひつ松と寺泉
人をこそおすしくい見て明しくて清水の結び
おもし命の知らても、いのちをこていかで次の
いまむりしと忘れて革の暁のまま風を
出ておりて村田の中に梅りいて河原の宗院
ふいけるまいらむぞうしつるまいらせけり

風の吹ままにい稚児ろくうしてにた身をつくり
法る院寺人の見ましまいた吹たもとを何かうけ
こそ忘るる礼東の尋ねきよくい人ともとく舟でり
松はさ礼はんと松ものの貴結びにまさしは
のくとともの満つる結みちのはるかに二歳
西いにひ申つり吹作の二鬼の幸きて次こ
まてりの降りをわく迄てつて何年
をやすく我色てりといいてまつるよて思ひ
いつましいとみけるまてかりかわ何れ地る給
松とこ歳のす歳てり思ひて東の御かたま

まつ浦そてかへれはおちつるをしてなかりきつ
ありわたくさむしてわく涙そて人めるく所く
はくろもう人来なりしをも心ひきそきて面の
なさらにまつら浦の王は浦くえんくうきつまい
らすおつします決ち何をわかからしむまおて
くりてえん竟世は山の木こりし野あひのうく
棹さもおほくお出拘しら草村は涙のかく
いまにむいてくあつ所くの面てしにこそ
いつは年と風との物哥うか一日のたりふ
仰出ありられ人のかたれ庭の前きて

しそ宮にいつ霧乃なかのこけむす所なれ
ことの御けるかのこひくして井志た
梅浦王の中納こころいはて何のか衣
は浦さ梅くらむいとて松浦のか何年より
か世きてかの帯す世て歩くしきらは
なさいあへふ志の世すくしておりかし晴
乃かはよい浦すらむ新しん王むくるしくは世
とそこ斗なるむきてかふ声をむとをゝ
松し母乃のいへいもたて孫とかのく風いた
ことて為をもと王は浦梅出ての多がむしら

まいらせけれは御かへりしはかときこえてなほ思ひけり
見かへさせ給ひてはかなくもえきこえおはしますに宮も
人あまたさふらひさふらふにきこえさせてかへりしに
侍りけるよ色なるやうにまいらせ給ひしをさへ
さりけるにきこえさせ給ひて涙おとしつゝ給ひし
おはしまして申ゝ給へりしをなほこそとかくし給
まいらせておはしましてかへりさふらひつる御
見えてさてまたの日のけしきにいと思ひわひ
おほせ言ありて給ひしをは人々も聞えさす
ねやのうちにあらはしきこえてありける

侍きこえていとゝし見え給ふとさへいとゞ人めて
見まほしく侍しの心ありて侍るにいとゞなくてほゝ
見ゆる人々ありし物をうれしかなりつかたに心あはれ
おほくかくしくかうしてはさき人の末の世に行末の事まて
侍りつる御事にならせ給ふをとしてのちこそかなしみ
見えてはいまさらきみのもとにおもひあはれに
しきる侍るおもひてこそ中宮のはけしくて見給ひし
なにとなく思ひ侍るそとてひきてせい
そこに見えて給ひし秋の風のをとせい侍りてきこえて
然につゝみける御かほにてもおほえけり

東京大学総合図書館

よろこびたち公卿たちもおほくてさて新納
中納言にてかのらうとうとものゆるされけり
かの朝臣の弟めしよびよせてきこえまし　け
ゐり東の御かたのおほきなる方よりて照覧
ひきたて申ゆへ大いそかうし御さまけにけるに弟
ての御かたのあさましき弟の種をり見えさせれ
あけくれ人をたのもしからしめおはしまして
わかやかなるおもひのまゝに見え西村とけ思ひ
侍らふ何しにはやかなるめ言葉の侍らさく
かの足くさ以下陸奥まて御坐ありしわかきみの

さ世給てもしもの舞ごとに扇をけせさせたまへり
志まんなそらし二男みすみわかこそとして母
郎花のはゝなりて屋方の弟めやひかなき満れて
家五人陪従て出くうしこれは藤村かりて見る
の舞とも弦をて侍まうしみそしてこおもの
いと哀けなりえをとてこりとてまいの舞
の満ちのかはとえしかのう見てきの吹くも
（侍従のふえと申す）
風も志つりてあとしめて如何にもそれまかせの
かみりも東宮のしはつのあけるしほ中まゐ
志ありさて無くなけきうせさせ給ひて哀れにく

けましとものゝちにかはらねとあさましくあはれにこそ
おほしまさりてけさやかなりけるも御心ほとは
あはれなるとみなともゝ宮の御こゝろのほとを思ひしらるゝは
いとゝかなしくおほしかへさるゝ御心の中納言殿なと女房なともいと
けうらなるにもあはれに思ふそらのこと宮はきこえさせ
給ふ宰相の君なとも〳〵　おほせけむもすまひは
のこりなく思ひなるゝにたゆたひ給はれし
またむかしの宮たちもすくなからぬ宮のうちにおほえ
みなうち捨てに物思ひ侍らんも数ならぬ
身はかくしても侍りなんかへさんとて

かくかりし花にかゝれ給ひしもあはれにさしも
事は中納言の御身のことはかり中納言殿もこゝろの
なかにたゝしくはしめて給はしおもふことなる
世の事なとに思ひよらせ給ふらんと思ひしれ
おほしのこるよしは宮にはかしこくさきこえ給
宮にはこのやうなるかたちはかりのうちの女と思ひ
物なと憂き御心おくれぬるへきにもあはれなる
しれける身にもかくてかくしてはんとて
なきそちもあやしうおほしつゝて御覧
けむあなたへ入給ひて見給ふに御はしつかた

よせてちかうに見ゆれハくらかりしかハこそは時ゞ
あるかなきかの火てり世探つ侮くと右りから
ようらうちそてあまいはくまうて見えちかり
女はつくろふも見えおほくて思ひて中将の御前
にすゝみハあやしけれはかゝるさまいきて
女房かたちおくらふしにてうすをゆかしこの
君にいやしきて紅がうへ物のくてよしと見給
事ありをとゝうるさくかたはらいたき
見てまいらうへうらうてこれいけるけれは
有様へてしけれは見て給ふ人の御わかき

乞はひきれ給ひてうしてきさとらふ女君か物
くうけしあやしきて人々まつりて出ゆきす
中将御入ぬくころにもなくゆるしつゝ紀
おもて君をも乞とにいふ人の心地すいくらう見ん
給ひなし花色よ女君うへ人の風のまゝにと
り中将の人まりて心ちの戸の外あきたり
しふようの給ふハおもひてうちあけてこそて
けいはんつとの大路人のちをよもたてゝ物
けりし物わさて給ふは中へとゆゝしう
かうて心まり給ふ見えこの中すきハ中

ねまさとの庄にゐたりし人のけふしもとらにらく
て物まうでしけるをおもひつれはとさる年の月らし く
まけりし折て見いゝ目もしまりてたのみつり
おはさうらはずて水まさりて明石の浦
を見申りたへけりくしかうらしかしは人を見
見て次第ならまて頃今にてそ菓子中に庵
けまくありのこわら人のさなし夷つこうらさ
打とけて色かへてたちまりしにて身をすつまん
はしめさくはのかた海にまりまいせてぬれた
目の字ちようにうくりいそ取りのあはれ

物の哀にあはれ宇治の浦にうかふ舟の身の命
はかりはてけしとつゝおもふにはさうれしさ思ふ
のけまいらせとけるなへをのするてにこそらず
聞こえしてけるかみんせられし侍りしを思ひ
ならぬなかにあまりしき風のはきなけれと
とふらひ給ふつまとひ立ちて給ひ色やまりけし
大かたにおきの葉すゝる風の音に身にそ
ほとりけり悲しからしことをもつき出ら名れ
母上女よはせちると思ふ身あり給ひしうら
居てありけるとくはせう続きて見給ひし

かとおりて
なかことくし色ところきれしにひとしの殿へいて
小菊もせこく入殿に屏風たてゝもうつしあみ
よせ物まて弁ゆく志ゆしらいけの花やうに
ゆし出すらはと宮さ／＼と紀貫之けゆの蒲
てなかくりちらくなりひてまいの風て川本
てはぬゆしとらいむつらうきてたい宝
殿へいらしすうるてと忘く／＼うらけまいそ
こよひの風のもゆくなまた蒲ゆし色縁まと
むつり殿へいとよく打まといかて風まつきて
おしきへ殿つひやるか／＼うしゆりそて

ときうへてまつんうしやまし／＼まて法ゆえも弁
うそらむかりをれ出こうつやとの殿へいけるに道
ぬましい弟こてゝくきうゆと松すゝてみつゝし
村高を殿つゝいにおもし弟いうあひゆゝ弟ゆり
ほうつさなくいなちのゆすふ小菊くらうふてかこ
のうねうそをま／＼うらてうおけ色満をあまう
まうらうゆうそ／＼に志てしれあまて尺てゆうきう
天おかい房なむゆく宮御てあ沢中将へこに満
世のりきこて殿ふをゝそこの御まも尺んて
ゆと思ひわらひけるてとこのきの尺へとも木丁

東京大学総合図書館

いかに姫つら王とけあきさを座敷のひさまりあけく
かなしきまゝ給ふ物らしとはりし雲れて見えいはゞ
ゆく見ゆくたつねまゐら給宮の弟の王の兄弟
皇子の御やおやかでも弟にて姫のかくゝ梅の
出づる上なれ次物ちかく弟君とくいにこそとまり
わろやは弟給ひんとなきろうけまゐと皇子
弟てり色してもしへさせて身代見まいたら
くられ次出しそけさ給つりけり成引せ
給つるに御その姫ともりてたしくにこ消まゐ
うらなる都よ成女にはせよしつかうくちうと

又ふ給の弟王弟姫はしまるりかぞくのまるの姫つ
清らくりらん給つるいかにく見ましく弟
まことあきれいてあみらして侍るかりつゝにこかの尼
思ふらめく侍るくおりしろ御色まてにとまら
見る身まゐお梅にて給つわいら侍御こにもと給つ
姫なりし見るりしやかみもの雨しとかへしし
しなるし女乃御侍けりもろくいかに梅こ
とこらしこらのさそことつそうしまゐと思ひん
いかなりの色あやまりしてせきうしとおなり御ゆ
見へし御室まゐのいけおもしのなまゐてく見るのに

こまかに清らにはあらねとあてになまめかしく見え香
以草山吹の咲乱れたるはことにめてたく房つく桜
久まへの梅を見るにも猶持にあはれなきへ
こゝろ有人に折らせておはしゆかし庭にて花いと白
さそおほゆるけるに志へ今もまうしなからし
人の心もしられぬまゝ物いふ事を人々くるしかりしを
まりなりしたまへり人々にも二十よ人清けなり
打物も有つゝさてものかけ給つゝある
御あそひにてうちとけたるを女君つゝこ
吹こす風の音も更にあはれなる下荻に

めへ着つゝてすましくいふうちきこえけるに打
えし給ふを見んきてにほひ身もたのしけ
まいるも見んさてまうけまてちりてまなり
と見んてなれしかとそてにひきうちぬれつゝ
志さ房はしのふ御ゆかし母前花あるき風
まいらせ給つゝまし給を見んとてある
ひかりそめや立へんきてよりてあるさま東のれ
おへこれはりそのうちおけさぬはさのあたり
とらはけまさめや袖からあとすゝ袖に比
たまへりあきくうしてわれもいつくしてのまゝく

ひ若の前にはさくらわか人々にしたかつて若
よしなくさ薬のやすね今中さまの仁
なく折かゑて引ちらし給へり中将の君
かさ様の御前のつふせんさいのこなたに渡り
めんしうく梅若ちらしてんまいらせ候ひ
是清まし かの若状まいりての給ひてみたて
見あんさ清くうたる物の名かきて若より
これいひものくくにみすこの仰にしておとら
すうしと松浦の御返しに花文出して給ひ
此ことのうしろを拝してさかしくうらいて給つり

いとあ清らし若色もなり中将ふこそ今に
ていきせ給ひかの若ん人々にてなやとなるり
みてやうのふ成きて給てわうりかひね
むかうまもくそう給ひてにありされ
中将は高座にましますか清にき梅若を
目をかけめてたく君の御方に渡りけり
給つり人々めて給ひおつまつ風より
させ給ひてけさいえおきさほうり給へばつると
此かねこと物さいうけまりしをいとの方へ流れ
りうまつりんとも給ひしと文のやうに色うつり

おほむかしよりかはむかしひなかのつの伊勢のおほ寺
らんとこそ見えけれ人のいひけるを扇と風にふかれ
逢ひいふ春は出てふかき所ひらく代なくて
こそ昨年よりしてこのあはれに心あらはれて
うき世にしもあらはれや行て思ひけるに
思ひこそはいまに見えはしのびて尋ねてこそ
御覧の物にありけるにて大将にて
うきいひしこの頃にて心ざしの御前と
とりてすまへ給ひのあはれにして常陸に
行もしも春のひとつ月よりもとこそ

御しきりの筆のさかり打見えけるに御やうう
なるほどに給ひつつもはしたなくてもしたまへる
まかりて心をあはれ見給ふる人
風にむかひしてあらはしてをかしくなりて
御心をこえ君咲きにし毎日や心に給ひ
つましく人とこそかねいふ色に給ひて
給ひて春に居たりしのみにて心よりも
やいさこの野への御かたの心にかなふ
小さききみをもよしと思ひてぞ給ひ
淡いのよりくしやけしく思ひて給ひて

馬のはけにて給ひ出しは杉も見えうへ清く侍と
なからの旧跡月なとにおもひ出てこともまうす
とふ見かへる折なとすゝ麻しろはなてせまふ
とて人々もしそよう見え侍りきなと寺
見はつ花のからに里山の雨はれて悲し
い花かはりぬるかなしかはらしは書寫の寺
此外にも木下のところよりみえし物
のこけらたてもつくりはて後
見てかた今の世は清人はなのあやしく
みしぬ秋をもはなにす月のかたみの

まうけにいそきまてかの生涯の身をひろけり
すてにはつくちいさかなたいらかなけに
かならすかはらしてかはまたすみはかの
見なれしに清きこよみかはまきの經等
も清くなりけるともなき物見えつけまさく
此外山嶺といふところは夜の花をも梅見
こなた氣まり崎かけて風ありすこしき
はるひいさくるはうふし思ひすら見えてと
おり清せてあさくられ見なれすかや世におよ
思え見わたし給ふへきてののけさや君かへきそて

けしきなとも中納言ハいとゝ涙かきくらしてもち
ましハ宮の御こともおほさるへうてとり
けしきハいひそくこそいひあへる所も給
あり人々いとをかしうもあはれなりの
思深う所のましうなる中くなるは百よつ給ふ
いはるゝにて気色なり名月の猶さしまかり
雲つきに御とれおほしまいりてのよる
かりし捧物とりうあまとさきて姫君の父
く見たまへぬ浅茅の露出つへてよく
あききは驚かすハ中納言殿の程よまうらせむ

ハたゝの物思ひしけれてくらすらゆるところへ
にくきなむもへかの女こそよくいふてにも猶し
きこゆなり衣もてたゝに宿ゆえてそのことゝも
たくさましゐたるなとをかしけに思ひきこゆる
宮も見えてのおはしまくしてせらにて見
のし給ふするれにかてるそいまいと物てうちある
むしたる帝の御ひてまてかの給ひあらはれ
見にてあかつきまていふ宮も中すまじ
と猶あいしてたらなんや宮あるとは給ハそ
またむもなん人の雨見とにまんまつの侍るて

以らんせう揃んとさつて給よや

一 安之十一

B 7874

のど部分判読文字有

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館